

俳句通信

特別作品25句 ● 好井由江「回転椅子」

連載 ● 虚子散文の世界へ② 本井 英

「浅草寺のくさくさ」ほか、文体の模索

連載 ● 金子兜太の彼方へ⑥ 筑紫磐井

「戦後俳句の視点(上)」

【特別作品60句】

山崎千枝子「野苺の花」

【実力作家鏡詠20句】

吉岡桂六「行く春」

平木智恵子「百千鳥」

山元志津香「人生の午後」

【新主宰鏡詠60句】

藤本美和子「春秋」

星野高士「艶やかに」

● 作品 ●

伊丹三樹彦・小路紫峯・大峯あきら・向田貴子・
今井 聖・津川絵理子・阪田昭風・石渡 旬・
藤村植徳・須原和男・酒井弘司・矢須恵由・
菅原潤也・西山 睦・白濱一羊・加藤かな文・
早瀬千鶴子・柳下悦夫・原 朝子ほか

● 好評エッセイ ●

先人に学ぶ俳句「川端茅舎(3)岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景

——極暑の広瀬」井上康明

虚子の肖像「虚子の芭蕉」坊城俊樹

地味で変な虚子句

五句集を読む「武蔵野探勝」阪西敦子

森澄雄の背なか「捕虜収容所から帰国まで」

千田佳代

椒郡を求めて「石澗と芭蕉」神田ひろみ

ほか



季節の中で

三重県伊賀市



早苗田のなか一本の道とほる



宮田正和

四方を山に囲まれた伊賀、遅い春でいっせいに咲いた感の今年の花々も、今ほもう美しい緑を満えている。そんな見慣れた伊賀の山河も、ここから松尾芭蕉が、横光利一が旅立って行った、と思うと、ひとしお、この木々の緑が胸に沁み入る頃である。

そんな日常に暇を見て歩く集落の道々は、今、田植が終わり、ほっとした静けさの中にある。趣味と想って始めた俳句が昂じて持った主宰誌が今年で三十五周年を迎えた。ことさらに生命をいとおしく思うこの頃である。



青田
（あおだ）

大粒の雨降る青田母の国
青田出て色失へり余り水
籾田徳二郎
成田千空

青田

この二十年間、毎月十回ほど句会や会議などで京都から大阪まで通っている。二十年前に比べると車窓からの風景も随分変わり、住宅地や造成地が増えてはいるものの、京大阪の県境辺りにはまだまだ沢山の田が残っていて、車窓から田植の様子や植田の風景を眺めることが出来る。早苗が根付き徐々に株を太らせていく様子など目を追いつつ観察出来るのも毎回の楽しみの一つである。梅雨時の降り続く雨に木々はいよいよ若葉を茂らせ、野も山も木津川や淀川沿いの長い堤も緑一色となり、それに同調するかのように田んぼも青田一色に整えられてゆく。

七月生まれの私は、万物がきらきら輝き始めるこの季節が特に好きだ。山間の田畑に囲まれ、寛の水音や蛙の声を日ごと夜ごと、気にも留めず暮らしていた頃のことになつかしい。青田風の吹き渡る故郷の景色こそ私の俳句の原風景なのかもしれない。

植田から青田に変わるころの風

早智子

回転椅子

好井由江

縞馬に少し風あり少し春
茎立ちの葉ほたん猫に向い風
魚は氷に上りて髪の静電気
雨降っている目刺焼く匂いかな
孕猫大きな顔をしておりぬ
白魚や酔はまなこにまだ残る



虚子散文の世界へ

—— 本井英

高浜虚子の俳句に関しては、これまでもそれぞれの立場から多く論じられ、語られ、評価されてきましたが、写生文・小説その他についての散文については、それほど多く語られたり評価されたりしてこなかったような気がします。特に小説については、近代文学史での位置づけはさう高くなかったようですので、いま改めて現代の視点から読みなおし、評価しなおしてみようという試みですが、この連載の趣旨です。企画段階では座談会形式による連載、複数筆者による連載などいくつか案がありました。結局、本井英氏一人にまず虚子散文の世界をのぞいてもらおう、ということになりました。ご愛読のほど、お願いいたします。

（編集室）

戦後俳句の視点(上)

筑紫磐井

一、新しい俳句の視点

(一) 堀切実の表現史

五回にわたり特に初期の金子兜太を眺めてきたが、今回は、戦後俳句史の中での兜太の新しい位置づけを考えてみたいと思う。すなわち、第二芸術、社会性俳句、前衛俳句、伝統俳句への回帰という通説でよくくりきれない兜太——いや兜太を置くことによつて見えてくる戦後俳句史を考えようというのである。

このために最近出された堀切実著「最短詩型表現史の構想」(二〇一三年二月岩波書店刊)が一つのきっかけになるので取り上げてみたい。俳文学者の堀切は「構想」のグラウンドデザインを、「今日とかく細分化して研究が行われがちな俳諧史・俳句史を、巨視的な視点に立ち、表現の流れや様式の連続性として捉えることを意図し」たものであり、「今日の日本文学研究の行きづまりを打破するには、こうした大きな視野に立った検証が欠かせない」と説明しているからだ。

堀切はそうした基本的立場を踏まえて、この「構想」において独自の提案をしている。それは芭蕉門流の論書から発見された①「姿先情後」(支考)②「虚先実後」(支考)③「取合わせ」(許六)の概念において最短詩型表現史をすべてたどり得るだろうと仮定している。「姿先情後」とは支考が「俳諧は姿を先にして心を後にするとなり」(二十五条)と述べている考え方であり、先ず姿(視覚的イメージ)が心に優先すると説く。「虚先実後」とはこれも支考が「言語は虚に居て実をおこなふべし」(「陳情の表」)で唱えた理論であり、発想法における虚構の優先を述べたものであった。「姿先情後」と「虚先実後」は同じ支考が唱えた理論であるだけに近いものがあると思う。一方、「取合わせ」は許六が芭蕉の言葉として引用している「発句は畢竟取合はせ物とおもひ侍るべし」二つ取合はせて、よくとりはやすを上手と云也」(「自得発明弁」)によるものである。その三つの原理を典型的に示す作品として次のようなものをあげている。